

巻頭言——生物文化多様性と自給農耕の持続可能性を探りたい

Preface : To study the sustainability of biocultural diversity and subsistence farming

インド亜大陸に関する本を長期計画で書き続けている。この亜大陸で栽培されてきた雑穀の植物学を描くだけではなく、この亜大陸の多くの人々が生活の基盤として信仰しているヒンドゥー教とはなにかを理解しようとしないと、上滑りするのではないかと思った。ヒンドゥー教には明確な教祖がおいでのならず、多くの神々は多様に化身されるので、神々の手引書(長谷川 2000、森本 2003)を手元においても、失礼ならなかなかな化身された神や人身が合致しない。

短い調査旅行でインド亜大陸を隅々まで回れたわけではないので、むしろ近くまで行きながら、入域できなかったブータンやシッキムから始めて、ダーズリンとネパールに文章の旅を進めつつある。ガウハティの空港で1時間も滞在できなかったアッサム地域から、その次にはアンダマン・ニコバル諸島について、まずは収集した文献によって旅をしたい。その他の地域は大方何らかの方法で実際に旅をしたので、いくぶん詳細な経験を語るができるだろう。

民族植物学研究室では手分けして、インド亜大陸で栽培起源した雑穀類の基礎研究を進め、おおまかなデータは取れたので、インド亜大陸起源雑穀の全体像を具体的に俯瞰する論文がいくつ書けることであろう。データを整理しながら、原稿作成中の論文も順次出せるので、インド亜大陸の雑穀研究に関して専門性を高めることができよう。

2012年にはフランスで国際民族生物学会があるので、キビの栽培起源を発表し、2014年にはブータンで同学会があるので、インド亜大陸起源の雑穀について総括的に発表したい。これまで行くことができなかったブータンを自分の目で見た後に、もう一度、インド亜大陸の雑穀文化に関する原稿を推敲して、この著作を完成することを目標にしたい。長い歴史のあるインド亜大陸の考古学的な発掘も進んできて、雑穀栽培の報告も相応に出てくるようになった。イギ

リスで収集した文献や考古学者たちの助言も役立つことであろう。

昨 2010 年には名古屋で生物多様性条約第 10 回締約国会議があったので、生物文化多様性を支える在来品種種子の保存の重要性に関して、CBD 市民ネット・人々とたねの未来作業部会として、会議に対して提言書を作成し、会場で配布したので、この間の経緯について本文中で報告したい。一方、2008～2010年の3年間に日本有機農業研究会の依頼(農林水産省助成事業)で、西日本の在来品種の種子保存について調査研究をした。京都、長崎、福岡、奄美および沖縄を調査旅行し、総計30戸余りの有機農家を訪問して多くのことを学ばせていただき、自給農耕が生物文化多様性の保全に重要な役割を果たしていることを明らかにすることができた。産業としての大規模農業と、生業としての自給農耕が共に大切であり、国や世界の食糧安全保障政策と共に家族における食料安全保障の政策を進めるべきだとの考えを深めることになった。

この提言は森とむらの会の活動総括の本で取り上げていただいた。とりわけ、暮らしの観点からホーム・ガーデンについて一層詳細な研究が必要であると考えた。欧米のクライン・ガルテン、ダーチャ、コミュニティ・ガーデンと日本の市民農園、さらには農山村の小規模自給農耕を比較研究して、在来品種種子の自家採種、生物文化多様性保全に関する意義を明確にした。

幸いなことに、自宅近くに市民農園を借りられ、家族でごくささやかな栽培を始めた。周りの市民農園家は素晴らしく完璧な園芸技術を示しており、確かな講習を受け、永年にわたって栽培をしてきたと推察される。今後は東日本の3次調査を企画して、都市市民農園と自給農耕の内容と栽培者の意識を比較調査してみたい。

2011.5.1

木俣美樹男 Mikio KIMATA